PDA25-1

即興型ディベート

研究報告集

Research Report of PDA Conferences

オンライン開催

2025 年 8 月 1 日（金）

一般社団法人　パーラメンタリーディベート人財育成協会

Parliamentary Debate Personnel Development Association (PDA)

目次

【即興型ディベート研究報告集】

はじめに　～「論理・表現」４年目、即興型英語ディベートの活用～
大阪公立大学／一般社団法人パーラメンタリーディベート人財育成協会　中川智皓

No.1　福井県立大野高等学校即興型ディベート研究報告書
福井県立大野高等学校　松居　貴昭　教諭

はじめに
～「論理・表現」４年目、即興型英語ディベートの活用～

大阪公立大学　工学研究科　中川智皓
（一般社団法人　パーラメンタリーディベート人財育成協会（PDA）　代表理事）

今年度で12回目となる夏合宿は、昨年に引き続き、オンラインでの開催です。今年度は、中学生と高校生を完全に分け、それぞれ別の日で設定しています。高等学校では、英語科での新科目「論理・表現Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ」が始まり、4年目となりました。文部科学省学習指導要領には、当該科目においての活動の一つとして、ディベートが明記されています。PDAでの体験会や合宿、大会で取り扱っている即興型英語ディベートは50分（1単位）で完結する形式で設計されており、上記授業においても活用されている学校があります。教育委員会や各地域での英語部会における教員研修にも本PDAのフォーマットが取り入れられています。ゲームの特性を活かした本ディベートの実践形式は、ルールに基づいて、議論がかみ合いやすい工夫がなされています。補助教材であるスピーチシートやそれに対応するフローシートなど、ルールに従うことでコミュニケーションが図りやすい形となります。

また、「論理・表現」の科目にも示されるようこれからは英語力のみではなく、“英語力＋内容”を評価する時代になると考えられます。PDAでは、英語力に加え、内容を評価するパーラメンタリーディベート検定®（PD検定®）を実施しています。PD検定®では、実際にディベートの実践を行い、内容と表現の両面からスコアが導出されます。スコアに応じたPDレベルを設定しています。PDレベルは論理的表現力となりますが、言語運用動力であるCEFRとの対応も参考に示しています。さらに、スコアやPDレベルの結果表示に終わるのではなく、今後の学習につながるよう、スピーチのよかった点・改善点をコメントしています。普段の学習の成果を測る一つの指標また今後の学習アドバイスとして、広く活用されることを願っています。

2025年度、PDAでは文部科学省「AIの活用による英語教育強化事業」に採択され、AIディベートシステムを活用していきます。ディベートの要素であるAREA（主張、理由、例、主張）の基本的な練習や、ディベートスピーチを行い、自動生成される反論、フィードバックで効率的な学習ができます。日々発展する技術を取り入れながら、教員の負担を低減させることは重要です。同時に、AIの特性や限界も理解し、生身の人間だからこそ得られるコミュニケーションも大切にしながら即興型英語ディベートを推進していきます。

謝辞　公益財団法人 KDDI 財団、一般財団法人 三菱みらい育成財団、文部科学省、大阪公立大学ほか、多くのご支援をいただきました。ここに感謝の意を表します。

※ここでは、パーラメンタリーディベートを通常授業（50 分）に導入できる形式にアレンジしたものを、なじみやすい・理解しやすい表現として、即興型英語ディベートと呼んでいます。

日本の一般的な生徒が実施できる形式に、「システム」として落とし込んだ点が特長です。ルールやスピーチシートをはじめとする考案したシステムは、単に一般的なパーラメンタリーディベートを簡素化したという位置づけではなく、議論の仕組みを整理し、教育的効果を高めるためのデザインが組み込まれています[1]。[1] 中川智皓、山内克哉、新谷篤彦、パーラメンタリーディベート（即興型英語ディベート）における議論の整理と評価の一考察、システム制御情報学会誌、Vol.32, No.12, (2019), pp.446-454.

即興型ディベート研究

松居　貴昭
福井県立大野高等学校

(1) はじめに

昨年度から授業でディベートの活動を導入した。導入した学年は２学年であり、１年次にディベートの活動をしていなかったため、活動の導入に苦労した。今年度もディベートの活動を取り入れているが、なかなか指導に苦労しており、多くの助言をいただきたい。

(2) 実践内容

昨年度の実践では、“Online shopping is better than real shopping.”というトピックで、グループを作り、論題について意見・想定されるアタックを十分に考えたうえで、ペアでのディベート活動を行った。別のトピックでも同じ活動を行い、単元末にペア形式でのインタビューテストを行った。活動全体として、意見→アタックまでの活動であり、ディフェンスやサマリーの活動はできなかった。

特に難しかった点としては、論理的なアタックについて十分に指導できていなかったことである。

今年度に入り、別の学年で同じようにディベートの導入を行った。時間に少しゆとりがあったため、ディフェンスまで取り入れて活動をしてみたが、論理的にかみ合ったディベートをできているペアは少なかった。どのようにすれば、相手の意見に対して効果的なアタックやディフェンスができるのかうまく例示をしながら指導するのが継続した課題点である。

(3) まとめ

英語を苦手とする生徒も、英語を話す活動が増えることで授業に積極的に参加する様子が見られた。その一方で、論理的なディベートをさせることや、入試にどうつなげていくかなど課題も多い。本校は、３年間を通してディベートを計画的に行っておらず、活動がこま切れになってしまっている。来年度以降はディベートを含め、年間の指導計画を見直していきたいと思っている。

即興型ディベート研究報告集　PDA25-1
発行日　2025年８月１日
発行所　一般社団法人　パーラメンタリーディベート人財育成協会
大阪府堺市中区学園町１－１　大阪公立大学　工学研究科　機械工学分野　中川研究室内